

---

# 真の大地

木上冷

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真の大地

### 【Nコード】

N0313D

### 【作者名】

木上冷

### 【あらすじ】

遙か昔、終末戦争が、世界を焼き尽くしたという。すべては無に帰ったかのように見えた。しかし、その中で、かつての美しかった大地の面影を残す、小さな谷があった。わずかに残った人間は、その地を巡って、争い、そして再び過ちを犯す。人は戦わずにしてはられないのだろうか。

## 序章

おごれるものも、いつかは滅び行く。栄華を極めた人類もまた、例外ではなかった。

自らを、己の欲望と憎悪が、滅ぼしたのである。

宗教の対立、思想の対立、資源を巡る対立。いつの時代であっても、すべての対立は人間を、戦争に走らせた。

そして、遙か遠い昔、すべてを無に返した終末戦争は、六つの大陸すべてを焼き尽くしたのだという。

わずかに残った哀れな人間は、己の過ちを、悔いるに十分な世界を見せられた。

荒涼とした山々は、四季を通してその表情を変えない。そして外界からの接触を拒むかのごとく、高くそびえている。

その山を越えると、小さな谷がある。そこには、あたりの荒れ果てた風景とは相異なる、遠いかつての面影を残す、豊かな緑と、肥沃な大地が残されていた。そこに暮らす人々はその恩恵を享受し、つましいながらも、その大地を、力強く、踏みしめるように、この時代を生き抜いていた。

「キヌコおばあちゃん、そんなところにいちゃ、風邪ひいちゃうよ。」

幼い少女が、丘の上に立っている老婆に声をかけている。

「風がでてきたよ、嵐がちかいね。さあ家へ帰るよ。」

老婆は少女の手を引いてひまわりの咲く丘を下っていった。両脇にある田畑では、農夫が汗を流していた。

季節は収穫の時期を迎えていた。

「ノブコちゃん、ノブコちゃん、もう寒いからはやくいらしゃいな。」

麓に着くと、少女の母親がそうせかす。

「もう、おばあさま、そんなに長い間、つれまわさないでください。」

「おやおや、それはすまなかった。」

老婆はそういつてわずかにほほえむと、その足で、この谷の首長、ユタカの家へと出向いた。

この老婆、キヌコは、この集落一の年配者で、この村のことを、おそらくは、一番熟知していた。

集落の中央に位置する首長ユタカの住居は、他のそれとは、屋根の色、で区別をしていた。

緑の屋根をしたこの家は、首長の家にふさわしく、一回り大きい。

「なんのようだ、キヌコ。」

「嵐が来る、大きな嵐だ、この村ももう終わりに近いね。」

「何の話をしてるんだ？嵐はこの時期にはつきものだろう。」

ユタカはまた、このボケかけている老婆の戯言を聞くのかと、心底うんざりしていた。

「違う、嵐と言ってもね、ただの嵐じゃないんだ。南のほうから、不吉な気配を感じるよ。」

「おう、そうかそうか、それは大変だ、だからひとまず帰りなさい。」

そいって首長は、キヌコを追い払うかのように家から出した。去年も、この老婆は、地震がくる、雷が落ちる、火事が起きる、と大騒ぎをしては、村を混乱させたからである。

追い返されたキヌコは村のはずれにある、家へと戻った。

家へと着いたキヌコは、そのまま、火がたかれているその前で、これから来るであろう災難を占った。

暖炉の中で火が黄色く燃え、尽きた木炭が音を立てて崩れたとき、キヌコは表情を、さらに陰しくした。

「やはりだよ……。」

キヌコは息子にそういった。

「何がです？お母さん。」

「今、（南方から災いあり。かくして、大地、人、獣、皆滅びぬ。）とお告げになった。嵐が来るんだ。さあ大変だよ。」

「嵐？お義母さん、大丈夫ですよ、こんなに夕焼けがきれいじゃないですか。嵐なんて来やしませんよ。」

そういつて、息子の嫁は、窓の方を指さして笑った。

そうである、息子の嫁が言うとおり、時は既に、夕刻となっていた。嫁がきれいだったといった夕暮れの太陽は、遠くの彼方を、不気味なほどに赤く、染めていた。

老婆は、うつむき加減に、一言、つぶやいた。

「嵐は、来るよ、絶対に。」

## 序章（後書き）

初投稿となります。レベルの低い物語となってしまうそうですが、なんとか続けていきたいと思っています。

## 一章 計画

嵐は確実にその時を待っていた。

谷から南へ数百キロ先に、寂れた都市がある。そこへ暮らす人々の暮らしぶりは、その街の景色から容易に想像できた。

その都市を首都とする国、（新天地）は、あの忌まわしい戦いを生き延びたある人間が、不毛の地と化したこの場所でこの先暮らしていくために、同じくして生き延びた人々を率いて、建国したと伝えられている。長きにわたり、人々はこの地を住みよい土地へとかえるべく、最大の努力をしてきたが、いつこうに改善は見られなかった。

国民は疲弊していた。

「国民の生活は既に困窮状態にあるのだ。早急に計画を実行しなくては いけませんぞ。 総統。」

「提督、この計画は失敗が許されないのですよ。時期を見誤れば大変なことになるでしょう。」

この国の建国者の子孫で、国家元首のヒラタは、この計画の第一の立案者である提督に、不信感を覚えずには居られなかった。

総統の横にいて、総統ヒラタの2倍はあるかのような巨漢の男は、総統の意見に耳も傾けない様子であった。

その男、提督ダイジ「スズキは、叩き上げの軍人であり、また野心家でもあった。総統の予想通り、実際には、ダイジ「スズキは、国民の疲弊の改善など、全くといって眼中にはなかった。彼には、今、多大な野心そのものしかなかった。

「いや、総統、提督の言うとおりです。国民の生活を考えれば、この計画もやむ終えないでしょう。」

「総統、私も提督に賛成します。」

周りにいた参謀たちは、提督の本心は知ってか知らずか、皆、彼に

賛同している。

「それでは、きまりのようだな。」

提督は満足げに言うつと、大きく椅子にもたれかかった。

\*

街では、人々が口々に、これから軍隊がどこか遠方に出兵するのだ、と噂にしていた。

少年兵で、街の警備を任されているカガヤは、面白くなかった。

下っ端であるけれども、自分は軍に所属している、という自負心があった彼にとつて、軍の重大計画を、町人が知り得て、軍人の自分が知らない、ということが、腹立たしかったのだ。

カガヤは、噂をしていた老父を捕まえて、問いただした。

「おい、お前、ちょっと待て！」

カガヤがそういうと、老父は一瞬、顔を強ばらせたが、声の主が少年の兵であることに多少、安心したようだった。

「お前、軍についての噂を流布したな、罰金だぞ。それが嫌なら、今ここで、その噂を正直に言え！」

「そんな兵隊さん、厳しいこと言わんでください。それにあなたは兵隊さんでしょ、なんでわしに内容を聞くんです？」

「・・・。僕はまだ下っ端だから知らないんだよ、だから、・・・早く教えてくれよ！」

老父は、この下っ端少年兵が滑稽で仕方がなかったが、罰金だけは避けたく思い、噂を彼に伝えた。

「兵隊さん、あんたは、ここから北の方角にある、山に囲まれた谷を知ってるかい。そこはこのような、荒れたところじゃなくてね、わしも見たことはないが、緑溢れる天国みたいなところらしい。大提督様は以前から、そこに我が国を移そうとお考えのようだった。そして明日、軍の一次部隊が、谷へと出発するんだ。」

カガヤは目を輝かせた。幼い頃、母から聞いた、かつての大地。母



も、祖母も、曾祖母も見ることがない世界。そんな世界がもうすぐ見られるんだ、と彼は興奮した。

\*

「提督、事はすべて順調に進んでおります。」

提督の右腕であり、頭脳明晰な男として、軍内部からも一目置かれている、大佐アツシキノシタは、窓から街を見下ろしている提督にそういった。

「よくやったキノシタ。民衆の様子はどうか。」

「はい、提督への支持は、とどまるところを知りません。」

「それは都合がよい。あほな奴らだ。後は総統をどうにかしなくては。」

「お任せください。提督。」

そういうと、大佐は部屋を後にした。

窓から見える夕日の光が、部屋の中に差し込んでいた。

雲のない今日の空は、遠く、谷を囲む山々まで見ることが出来た。

提督はそんな景色を眺めながらひとり、椅子に腰掛け、これからの展開に、思わず、笑みをこぼした。

## 一章 計画 (後書き)

第二話です。まだまだ書きたいことがうまく表現できません。

## 二章 密会

谷の夜明けは、いつも寒い。なおさら、今は、冬の足音が聞こえる季節であつた。

その朝、谷の首長、ユタカの娘マイコは、不快な声で目を覚ました。「谷の者、よく聞け、今日は嵐がくる日じゃ、気をつける！」

谷の年長者キヌコが、街の中央にある広場で、大声を張り上げて、叫んでいた。

しかし、谷のたいていの人間は、またボケた老婆が何か騒いでいる、とは思わなかった。

騒ぎにみかねた首長ユタカは、表に出て、キヌコをなだめ始めた。

「ふう、あの婆さんには困つたものだな。」

朝食の時間にユタカはそういつて、ため息をついた。

「嵐って何の事かしら、ただの嵐なら、この時期なら当然でしょ。」

「ボケかけた老人の戯言だ、意味もないさ。」

ユタカはそう娘に言うつと、裏庭にある、畑を見に行った。

父親が出て行くのを確認したマイコは、

「私も出かけてくるね、ママ。」

「コースケ君によろしくね。」

マイコの母親は、そういつて、ニヤリとマイコに笑つた。

「いやよママ、そんなのじゃ無いよ。」

そういつてマイコは、家を駆けだしていつた。

今日は、谷の青年、コースケとの密会の予定だつたのだつた。もちろん、父親は知る由もないのだが。

いつもの密会場所は決まつて、丘の上の小さな小屋だつた。少し早めに着いたマイコは、遠くの景色を眺めた。今日は、昨日に引き続きよく、晴れている。

生まれてからずっと、この谷で暮らすマイコにとって、谷の向こうの、荒れ果てた世界は、想像すら、出来なかった。

まして、人がそこに暮らしていることさえも、である。過去の戦争は聞いたことがある。しかしそれは、あくまで他人事のように、思えた。

しばらくすると、青年コースケが丘を駆け上ってきた。この青年は、村の農夫の一人息子だった。

お互いに結婚を考えていたが、マイコの父親が反対することは、目に見えていたので、言い出すことは、出来ていなかった。

「待たせた？親父の仕事手伝っててさ。」

「ううん。大丈夫。」

そういったあと、二人は青空のもと、長い間、会話を交わし合った。

時刻は正午を迎えていた。今朝騒いでいたキヌコは、あまりに興奮したため、寝込んでしまったという。

丘の麓で別れたマイコは、自宅に戻った。ユタカは居間でくつろいでいる。

マイコは丘を下るとき、青年コースケとの関係、結婚の意思を伝えようと、心に決めていた。

そして、いざ父に伝えようとしたとき、外から悲鳴にも近いような叫び声が聞こえた。

「み、南から軍勢がつ、（新天地）軍と思われる軍勢がこちらに向かって来ています！」

それは南側からの、谷への道を守る、衛兵からだった。ここまで疾

走してきたのか、事を伝えるなり、広場に倒れ込んだ。

ユタ力はすぐに表に出て、衛兵に近寄って、訪ねた。

「本当に（新天地）軍なのか？それは確かか？」

「は、はい、確かに見ました。」

「わかった。報告、ご苦労であった。」

そう言うなり、ユタ力は顔を険しくして立ち上がり、衛兵からの報告を聞きつけ集まってきた、谷の者達と話し合った。

「（新天地）軍が、なぜ？」

「何が目的なんだ？」

谷の者達は口々に、そう言い合った。その中、ユタ力は皆の中央に出た。

いいか、お前達は、いわば、平和ボケしているのだ。谷の外の荒れ果てた世界は、この谷に住む我々には想像し得ない世界なのだ。彼らは、そこに暮らしておる、生きていくだけでも困難な生活だ。生きるためには、どんなことでもしてきたらうし、そしてこれからもするだらう、そして今、彼らはこの谷を、生きるために必要としているかもしれない。しかし、言うまでもなくこの谷は、我々の谷だ。何としてでも、守り抜かねばならない。皆の者、戦いになるときは、覚悟、してくれ。

ユタカがそういうと、皆はしばらくの間、静まりかえった。  
その静寂を破ったのは、娘マイコだった。

「・・・これって、侵略？」

ユタカは深くうなずいた。

「そうだ、これは侵略なんだ。・・・嵐が、来たんだ。」

## 二章 密会 (後書き)

第三章は、かなり苦勞しました。出来にはまだまだ満足できませんが。

### 三章 出征 前編

提督、ダイジィスズキの朝は、いつも早い。まして、今日はなおさらである。

谷へ遠征する、軍の第一次部隊は、もう既に、その準備を整えていた。

長年思い描いてきた、彼にとっての最高の舞台は、もはや、その幕開けを、迎えていた。

「提督、部隊の準備が完了しました。いつでも出撃可能であります。

」  
大佐アツシィキノシタは、ダイジィスズキにそう伝えようと、部隊の待機場所へと戻っていった。

この第一次部隊を、今回率いるのは、他ならぬ、ダイジィスズキその人であった。

彼は長らく、戦いの第一線からは退いていた。しかしながら、彼には今回、この計画だけは、自ら出向く、必要があった。

「ねえ、私も連れて行ってくださらない？美しい自然には、美しい私が必要でしょう？」

そういうのは、提督の愛人、ミエコィカミムラであった。美しい私というのは、一概に、その高い自尊心から発するのではなく、実際に軍内部からも、その容姿には、高い評価を受けていた。そして、その美女の本心は、全くもって、提督など、眼中になかった。

ただ、軍のカリスマである提督の寵愛を受けているという、そのステータスが、彼女の目的だった。彼女の愛は、常に、彼とは違う方向に向いていた。しかし、そんな彼女の内面を、彼は知るはずなかった。

「戦場は女の居るところではないのだ。お前を危険にさらす訳にも



いけないしな。」

「あら、今回の出兵がどうして危険なの？相手は、たかが五千人足らずの小さな集落なのよ。すぐに征服できるわ、そんな所。それに、万が一の時には、貴方が守ってくれるでしょう？」

ミエコはダイジの首まわりに手を回し、その身体を彼に寄せ、その美しい声で、そういった。

「しょうがない奴だな、わかった、連れっててやる。」

女に多分に弱い、この提督は、結局自身の愛人を、戦場に、連れ立つことになった。

この都市の中央部には、開けた、大広場がある。今日は一点の曇り無く、太陽の光が、広場の地に、煌々と、降り注いでいた。

そして、今そこに、これから出兵する、第一次部隊が、待機していた。

この第一次部隊は、軍の精鋭から集められたエリート部隊であった。その点から見ても、この計画、この出兵に対する、軍の意気込みが、感じられた。

しばらくすると、總統ヒラタ、それに引き続き、提督並びに軍幹部が、部隊全員の前へ出てきた。

先ず、總統ヒラタが、部隊に、出陣に際しての、挨拶をする予定となっていた。

總統ヒラタは、穩健派の總統として、知られていた。事実彼は、もともこの計画には反対の立場を、とっていた。この計画は、侵略に値する、と考えていたのだ。しかし、国民が困窮しているという、提督の進言を受けた總統は、とうとう、この計画を認めた。

しかしこの挨拶には、彼のその穩健さと、この計画に対する若干の後ろめたさが、多分に、現れた。

今、我々は、重大な、国家の危機に直面しています。あの忌まわしい戦争以来、私たちの先祖は、この地で、絶えまぬ努力をしてきました。しかし、国民の現状は、既に人間の生活の限界を越している！あの谷は、最後の希望なのです。しかし、皆さん、これだけは忘れないでください。この出兵という決断が、決して安易なものではないと言っていることを。そして、あの谷にも、また我々と同じ、人間が住んでいるんだ、ということを。これは侵略では無いのです。あなた方の、健闘を、祈ります。

部隊から、そして広場の周りの聴衆までもが、一斉に拍手した。提督は、ただその様子を、彼の横で静観していた。それに続いて、提督が、訓辞を述べた。

一次部隊の諸君、まず君たちに、おめでとう、と言っておこう。君

たちは選ばれし者だ。諸君は知っているだろうか、かつてあの戦争下を生き延びた、偉大なる我が建国者、ミツヲ「サトー」は、今まさに、君たちのいるこの地で、この国をお建てになったということを。その時、偉大なる建国者は、この国を、（新天地）とお名付けになった。この地が、この国が、人類にとっての、新たな天地になるよう、という願いからである。我が国の精神は、常にこの願いにあるのだ。

あの谷は、緑溢れ、動物たちが戯れる地上の楽園であると聞く。そうだ。まさに谷は、我々の求め続けた、新天地、そのものではないか。遠くない未来、建国以来の我々の願いは、叶うであろう。既に、新たな大地、そして新たな時代に、我々は、足を踏み入れようとしているのだ！全ては諸君にかかつておる。ともに、新たな時代を創ろうではないか。では、諸君の健闘を、祈る！

提督の訓辞は、より力強く、そして、より勇ましかった。これから出陣に向かう兵士にとって、ただ、穏健な言葉よりも、そのように勇ましい言葉の方が、いつそ彼らの心に響くものがあつた。聴衆の者、軍関係者、全てが、割れんばかりの拍手喝采を、彼に浴びせた。それは、もはや国民の支持は、総統よりも、提督にあることを、明らかに示した。

提督は、己の演説と、その拍手に、酔いしれていた。全ては、彼のシナリオ通りだった。

そして、総統ヒラタは、自らの地位そのものが、彼によって、脅かされていることを、今更ながらに悟った。

そのあと、部隊は、盛大な見送りを背に、とうとう首都を離れ、谷を目指し出陣した。

兵士は皆、これから見る新たな世界、真の世界が待っているのだ、と目を輝かせていた。

そんな中、国境を出たその付近で、ふと、先頭をいたダイジ「スズキの耳に、少年の声がした。

「お、俺も、連れってって、下さいっ！」

三章 出征 前編（後書き）

ただただ、大変でした！

（11/17）サブタイトル変更

## 四章 出征 後編（前書き）

前編のあらすじ：

いよいよ谷へと出征することになった（新天地）軍、第一次部隊。国境付近で、提督ダイジースズキは、ある少年の声を耳にした。

## 四章 出征 後編

その少年は、息を切らしそう言う、提督を仰ぎ見た。

「何だ小僧、この方を誰と心得る！」

提督の護衛兵2人が、慌てて少年を追い払おうとする。

「まあ待て、私は少年と話をしているのだ。ところで少年、まずは名を名乗るべきではないかな？」

提督は、にこやかに、そういった。

「し、失礼しました！私は、（新天地）国民義勇軍三等兵、カガヤであります！先ほどの、ヒラタ大總統様の御演説に、大変感銘を受けました。今、我が国が面している、未曾有の危機を解決するのは、あの谷との、共存の他ないと思います。どうか、私も、この出征に参加させてください！」

「おのれ、黙って聞いておれば、提督殿に向かって、よくも偉そうに、そのような戯言を！」

護衛兵は、少年カガヤに、飛びかかるうとする勢いだった。

「おい衛兵、騒ぐな、こいつだって我々の軍の同胞だ。ところでカガヤ、おまえは、あの谷へ一緒に行きたいのか？」

「はい、そうであります。我が国の未来を左右する、希望の大地を、この目で見たいのです。」

提督ダイジスズキは、本来なら、カガヤを即、処刑しても、おかしくない、はずであった。

あれだけの雰囲気、あれだけの拍手喝采の中で、カガヤは、總統の挨拶に、感銘を受けたというのだ。どれだけ鈍感な少年であろう。事もあるうちに、それを提督の前で、言ったのだ。

しかし今でも、カガヤが提督の前にいる事が許されているのは、提督の、天性とも言える、人を見分ける、その目のおかげであった。ただの将校であった彼の、ここまでの出世には、多分に、その目が

役立ってきた。

この少年兵は使える。こいつが言う、くだらぬ共存主義などに惑わされたのではない。その主義を、俺が、利用するのだ。こいつの鈍感さは、利用するには都合がよい。そして、使えなくなれば、捨てるのみだ。

「ふむ、貴様、良い目をしてるな。よし、一緒に来い。共に希望の大地をこの目で見ようではないか！」

「はい！本当に有り難うございます！精一杯頑張ります！」

そういうとカガヤは、部隊の列の、最後尾についた。カガヤがつくのを確認すると、護衛兵たちは、驚きの表情で、お互いの顔を見合わせ、こう言った。

「いいのですか、提督、あとでいろいろと面倒なことに・・・」

「かまわん、衛兵の分際は黙っておれ！たかが少年兵一人など、どうにでもなるのだ。」

護衛兵は黙り込んだ。

「部隊全員に告ぐ。今、我々は、大きな味方を得た。若き同胞、カガヤ君が、急遽、部隊に加わることになったのだ。年齢は若いが、才能に満ちた少年であるから、皆、宜しく頼む！」

提督がそう言うと、再び部隊は出発した。

時は今、日の入りの時刻を過ぎた。部隊は、国と谷の中間に位置す



る、不毛の大砂漠に入っていた。ここは、何の頼りもなしに立ち入ると、二度と帰れない、とされている。

事実、この大砂漠が、国と、谷を、長年の間、隔絶させていた。部隊はこの砂漠の中を、夜間は進行出来ないとして、ここで一夜を越すことにした。カガヤは直ぐに、キャンプ設営にあたった。

「おい、新入りかい。宜しくね。僕はツトム。コンタっていうんだ。」

同じくして、キャンプ設営をしていた、陽気な男、コンタが話しかけてきた。

「は、はい。宜しくお願いします。」

カガヤは、この部隊が精鋭で構成されている、と聞いていたが、この男を見ると、疑いたくなった。コンタはそんな、ひどくとぼけた男であった。しかし、カガヤが、この男の真の実力を知るのは、大分あとになってからのことである。コンタはカガヤに息つく暇も与えず、しゃべり続けた。

「あなたは何でこの部隊・・・」

「そうだね。あの提督ってのは、うん、すごいね。あれだけの志持った人いないよ、本当。」

あつ、相手にしてくれませんか、いいです、次行きます。・・・でもさ、すごいぜ。」

長い間、こんな調子でしゃべり続けたコンタであったが、カガヤもそれほど嫌ではなく、むしろ彼から発せられる話は、どれもカガヤにとって、新しいことばかりで、軍内部の実情など、内容は多岐に渡った。

「はい、カガヤ君、提督の愛人の名前は？」

「い、いや知りま・・・」

「ミエコだね、あ、知らなかったの？こんなに噂なのに？遅れるな。君は。実際この遠征にも、ついてきてるって話だぜ、マジでやばいですね。」

「へえ。そうなんで・・・」

「ほらほら、手が止まってるよ！」

そのような中、テント設営は終了した。コンタは、作業に疲れたのか、それとも話したことに疲れたのか、早々にテントに帰っていった。しばらくすると、星が、夜空に輝きを添えていた。カガヤは、その星空を見上げた。

「この星は、国では見られないな。でもきつと、あの谷の人たちは今、この星を見てるんだろうな。」

夜の砂漠は、意外にも、一段と冷えた。カガヤも、明日に備えるため、テントへと戻っていた。部隊の皆が、寝静まった。それと同じ頃……

キャンプ地から少し離れたところで、二人の男女が会話を交わしていた。彼らを照らすのは、砂漠の夜空に輝く、月と星だけだった。「ねえ、どうして、どうしてこの私が、こんな苦しい思いをしなくちゃいけないのよ。」

女が男にそうせまる。

「そう言わないでくれ、俺だって辛いんだ。でも状況を考えてごらん？君はあのゴミみたいな奴の、愛人、だろう？」

「でもそうだったから、あいつの側にいたから、あなたと……」

女は男の胸に顔を押し当てて、泣いていた。

「わかってる。それを言うな。今日は、久しぶりに二人きりになれるんだ、今、この瞬間を大切にしようよ。」

「……そうね。」

そう言くと、二人はお互いの愛を、交わし合った。夜は更けていった。闇は二人を、隠すように覆っていった。

## 四章      出征      後編（後書き）

駄文の膨張は留まることを知らず、2部構成となった今回でした・。  
・。暗くなりがちなのこの物語に、陽気なキャラクターを、というこ  
とで登場したコンタですが、流れからひどく浮いております・。・。  
上手くないかたのです。それでも大分話は進んできました。  
これから、頑張りますので宜しくお願いします。

## 五章 作戦 前編

谷の衛兵からの報告があつたその日、谷は、大混乱に陥つた。

敵がこの谷を攻めてくるんだつて。

皆殺しにされるらしい。

噂は、たちまち谷中に広がった。首長を始め、谷の有力者たちは、急いで年長者キヌコの家へと集まり、今後の方針を練った。

「谷中がパニックに陥っています。このままでは、さらに危険です。加えて、襲来の際は、我が集落が、一番最初に相手と遭遇するはずです。援軍を要請します。」

そついうのは、谷の入り口に、ほど近い集落の代表、ヒラヌマだつた。

「谷中の混乱については、この会議が終わり次第、すぐに全住民の集会を開いて、現状を話そう。援軍についても検討しよう。」

ユタカはそついうと、未だ寝込んでいるキヌコを起こして、話しかけた。

「キヌコ、お前のお告げを信じなくてわるかつたと、本当に後悔しているよ。しかし村は危機的状況だ。どうすればよい？」

「ふん、何を今更騒いでおるのじゃ、お告げの通り、この谷は皆、滅びるのじゃ。助かる道など無いに等しい！」

「しかし、このままやられるの待つのでは、あまりにも・・・！」  
キヌコとユタカは、そのようにして、長い間、話し合い続けた。

「・・・砂漠と谷を結ぶ、山間の道は、ひどく狭い。軍隊も一列に編成して進行するであろう。あの道の両側は急傾斜の崖になっておる。少数の者で待ち伏せして、よこから不意をつけば、多少相手を驚かすことはできるだろう。」

それは、この谷の地理に精通している者ならではの、考えだった。

「なるほどそれは気づかなかつたぞ。それは良いアイデアだ、キヌコ。」

「しかし、そんなことをしても、必ず滅びるのは明白じゃ。無駄な  
あがきはよしとくれ。」

キヌコはそういうと、また寝込み始めた。

「確かに、その作戦はうまくいきそうですね、首長。」

「作戦を実行する者を選ばなくてはいけない。すぐに取りかかる  
う。」

会合のあと、首長達は、谷全員を集めて、集会を開いた。

「皆さん。いま我々の谷は大変な危機に瀕しております。（新天地）  
軍が、南の方角から、攻めてきている模様です。何もしなければ、  
この谷はすぐに占領されてしまうでしょう。騒いでいても、なにも  
変わらず、何も始まりません。だから皆さん、この谷を守るために、  
立ち上がってください。立ち上がるべき時は、今しかありません！」  
谷中の者達は、一様に不安な様子であった。しかし戦わなければ、  
占領されてしまうことが明白なのは、誰もが知っていた。  
ユタカは続けて、さきほどの作戦について、述べた。

「我々は作戦を練りました。南口の道から奇襲する作戦です。この  
作戦がうまくいけば、相手に相当のダメージを与えることが出来る  
でしょう。その作戦を実行する者達を、我々が、選ばせて貰いまし  
た。危険な作戦ですが、彼らには活躍して貰わねばなりません。そ  
の者達は、彼らです。」

その時、首長の娘、マイコは、はっとした。

それだけはイヤ！ いかないで・・・

集会後の様子は、様々であった。

不安な様子である者。

自分の家族が、作戦に関わらなくて、ほっとしている者。また逆に

選ばれて、悲しんでいる者。

愛する者が、危険にさらされることに、悲しむ者。

それは、谷全体に、暗い影を落とした。

そのあと、作戦を実行する者達が集まり、打ち合わせた。  
そこにいる人物は以下のようなようだった。

ミツヒロ〓ヒラヌマ、谷最南の集落の代表。

コースケ〓コマツ 谷の農夫の青年。首長の娘の恋人。

カズヤ〓ノマ 谷随一の運動能力を持つ男。

マサト〓ハエノ 谷の地理に詳しい。

「というわけで、皆さんに集まってもらったわけだが。」

ヒラヌマが、話を切り出した。この作戦チームのリーダーらしい。

「あの、あなた方ならわかりますが、何で僕もなんですかね？」

コースケは、皆に問うた。

「お前さん方は、若くて力があるだからだよ。」

そういつて、ノマ、コースケをさし、ハエノがいった。

「その点、私は知識しかないからなあ。皆さんの足手まといにならんよう、せいぜい頑張ります。」

「足手まといなんて、そんな。」

ヒラヌマは、一応、笑って首を振って見せた。

「出発は、今日の深夜0時。敵は朝方、あの場所を通ると思われるます。攻撃武器は、銃、その他。質問は？」

「別にねえよ」とノマ。

「特にないです」とハエノ。

「何時頃、帰れますか？」とコースケ。

「コースケ君。これは訓練じゃないんだ。作戦が終了すれば帰れる、失敗したら、二度と帰れない。それまでなんだよ。」

ヒラヌマはそういうと、そのまま黙ってしまった。

「そうですね・・・」

コースケも、この責務の重大さを、今更ながらに感じた。沈黙が流れた。その沈黙を破ったのは、ノマだった。

「でもよ、やるしかねえんだよ、俺ら、この谷、守るんだろ？」  
彼の言葉は、重かった。

## 五章 作戦 前編（後書き）

またまた二部構成でお送りいたします・・・。  
学生にとつての大きな障害、定期テストを完全に超越して書いてお  
ります・・・。



## 第六章 作戦 後編（前書き）

前編のあらすじ：

（新天地）軍が攻めてくる、そんな噂が谷中に広がっていた。その  
ような中、奇襲攻撃が提案され、実行されることになった。

## 第六章 作戦 後編

夜の暗闇は、谷を包んだ。

しかし人々は、決して眠りに落ちることはなかった。皆、不安と恐怖を感じていた。

時は既に、出発の時間を迎えていた。数人の男達が、南の集落の代表、ヒラヌマの家へと集合していた。

「失敗は許されない。とりあえず、指揮官らしき人物を発見したら、無線で報告してくれ。」

「そのあとはどうするんです？」コースケが訪ねた。

「私か、ノマが、射撃するのみだ。リーダーさえ殺すことが出来れば、部隊も混乱するはずだ。しかしそれでは根本的な解決にはならないだろうがな・・・まあ良い、では出発しようか。」

ヒラヌマが皆にそういうと、一同はうなずき、そのまま目的地へと発った。

目的地までは3キロほどの道のりであった。その間、皆、口を閉じたまま、無言に歩き続けた。一人一人がこの任務の重さに絶えていたのであった。月夜は、彼らを照らし、大きな影をつくった。

砂漠と谷の境界の、細い道は、左右を急な斜面で囲っていた。まるで、地上の楽園と外界を隔絶するかのようであった。一行は、その道の終点近くの、斜面の茂みで、その時を待つことにした。そこからは、南の方角も良く見渡せた。夜明けまで、まだ時間は幾分あった。

「しかし、狭い道だな、おい。なんでこんなに狭いんだよ。」

ノマはこの道に、どうしようもない不満を呟いていた。

「この道はですね、我々の先祖があとからつくった道ですよ。そもそもこの道は谷と外を結ぶ唯一の通路ですから、この道がつく

られる前には、谷は完全に外界から遮断されていました。ここからは、私の推測の域に過ぎませんが、我々の先祖は、終末戦争時に、戦争の災難から逃れるために、この谷へ、道無き道を来たのではないかと思うんですよ。しかしながらですね、いくら周りが遮断されているとはいえ、空には何の遮りはありませんからね、どうやって災難を逃れたのかは、不明ですけど。」

ハエノはそう持論を展開した。コースケは谷の歴史に興味を持ち、さらに質問した。というよりもむしろ、これから起こる事への緊張を、幾分かは紛らわそうとしたのである。

「なんで、そういうことは、先祖代々伝えられなかったんでしょうね。」

「うーむ、私も長年研究していますが、全くといってそのような記録は出てきません。」

「あのキヌコの婆なら知ってるんじゃないの？」

三人は谷の歴史の会話を続けていた。しかしその間も、時は刻々とその時を刻んでいた。

その時、ヒラヌマが口を挟んだ。

「その話だがな、実はずっとそのことが伝わっている家があるんだ。谷の秘密について、な。」

「そういう家があるとすれば、間違いなく首長の家でしょうね。あの家の先祖は代々首長をやっているようですからね。違いますかね。」  
ハエノはすかさず答えた。

「その通り、あの家には代々その秘密が伝えられているらしい。もちろんいつさい外部流出は許されないようだ。」

「何なんですか、その秘密？」

コースケがそう質問した。

「我々には絶対わかり得ないんだ。しかしおそらく内容は、終末戦争時に、どう我々の先祖は生き延びたか、どうやって土地を荒廃させずに、豊かな自然を守り得たか、とかいうことなんじゃないか。ともかく今の我々には何の必要もないってことさ。ほらもうすぐ夜

が明ける。準備を始めようか。」

ヒラヌマはそういうと、作戦の準備に取りかかりだした。

そうかな、なにか今の俺たちに必要なことがある気がする。

コースケは、話を聞いて、そう思った。

この時期は、もう夜明けが遅くなっていた。目をやれば、東の彼方が、まだかすかにぼんやりと明るく見える程度である。

ふとコースケは、双眼鏡で南の方角を眺めた。するとそこには、出発しようとしている（新天地）軍の部隊があつた。初めて見る外の人間、だった。

「敵だ、敵が動き出そうとしていますよ、皆さん！」

そう聞くと、皆の間に、鋭い緊張が走った。それは、時が既に、すぐそこまで迫っていることを示していた。

## 六章

## 作戦

## 後編（後書き）

大変更が遅れてしまいました。しかししばらく更新しないと感覚を忘れてしまいます。これも全ては定期テストのせいでもあります。これからはまたペースを速めて、年内完結を目標に書いていきますのでよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0313d/>

---

真の大地

2010年12月29日08時45分発行